

書 評

ジュディス・ブレイク稿「所得と出産の動機」

Judith Blake, "Income and Reproductive Motivation",
Population Studies, Vol. XXI, No. 3, November 1967,
pp. 185-206

アメリカ、カリフォルニア大学人口学部長の著者が1967年4月開催のアメリカ人口学会大会での報告をまとめた本稿は、合衆国の白人についての1936年から1966年までの出産力に関する全国的な調査のうち、経済的水準との関係を調べた資料を検討し、所得と希望子供数との関係を概観したものである。

経済的な地位もしくは所得水準別に、白人男女の、カソリック教徒とそれ以外、ホワイトカラーとブルーカラー別の理想子供数の調査結果を整理した9表に掲げ、結論としては、近代的な出生コントロールの広く行なわれている社会では、所得水準の上昇とともに理想の子供数も多くなるとの一般の考え方は、これらの調査からはその事実を確認できないということである。所得の高い階層では、子供のための直接、間接の費用も増大するため理想子供数はむしろ少ない。カソリック教徒は所得の上昇につれてより多くの子供を希望するが、必ずしも直線的でなくU字型の関係さえ認められる。

カソリック教徒以外の白人をホワイトカラーとブルーカラーに分けると、生活様式をよくする要求の方が、子供がふえ消費が増大する可能性よりも重視される、という仮設どおりである。ホワイトカラーの勤労者は同じ所得水準のブルーカラーよりも理想子供数が少なく、ブルーカラーの中では所得水準の高いものが低いものよりも理想子供数は一般に少ない。所得の上昇とともに理想子供数も増すという関係は、経済以外のなんらか有力な力が所得上昇ともなう子女養育費の増大を相殺するものでなければならない。そのような力は信望とか尊敬とかの象徴的なしくみについての限ぎりない要請に結すびついたもので、近代的な出生力分析のための経済的な枠組に関しては皮肉な結論ということになる。結局、理想子供数が最も少ないのはカソリック教徒でないホワイトカラーの白人で最も所得水準の高い人たちで男子は約3人、女子はこれよりやや多い。すなわち、アメリカ人は、最下層か、反対に上流の階層でそれぞれ異なった圧力を感じる人たちでも、理想子供数は3人以上で、人口増加を静止すべき2.5人を上まわっている。

理想子供数に関する以上の資料は実際の子供数ではないが、経済的要因が実際の出生をどれだけその理想に近づけるかの最も大きな力となり、社会的、経済的な緊迫の時代には平和な繁栄の時代よりは子供数を縮減することとなる。実際の出生の行動の変化を知るには、直接的な意図とともに潜在的な家族数の選好についても知ることが必要で、大きな社会的変化をみた長期間の理想子供数が3人をやや上まわるものが大多数であれば、実際の家族の大いさがその理想をはるかに下まわる水準で安定することは多分ないであろう。低い水準で安定するためには、理想の子供数を支持する制度的な構造、すなわち家族と、再生産とをつなぐ社会的制度としての一つの役割に、大きな変化を経験しなければなるまい。以上の調査結果から、効果的な人口政策は、出生制限の手段のみでなく、出産に対する動機とも関連づけて考えなければならないと著者はいう。

わが国では、最近の世論調査（毎日新聞社人口問題調査会の1967年調査）では、年齢50歳未満の妻の半数は子供3人を理想とするが、現実には2人でよいと答え、所得の低くさが抑制に作用するとみられ、そうした抑制は中間の所得層に強くてU字型を示している（河野稔果，“出生力に及ぼす社会経済的要因”，人口問題研究所年報，第11号）。避妊の知識がどの階層でも等しければ、U字型の現われるのは、出生力と経済的水準との間に正の相関が現われる第1歩であるというのがアメリカでの経験であるが、上の諸調査によると、将来所得水準の高い階層では子供の費用の増大によって必ずしも子供数は多くないことになろう。いずれにせよ、先進国の経験に徴して、丙午による特異な出生減とその反動とを経た1968年以後の、わが国出生力の動向には最大の、かつ細心の注意を払わねばなるまい。

（上田 正夫）